機械と人間のエモーショナルな関係

メディアアーティスト　市原えつこ（いちはら）

撮影：千倉志野

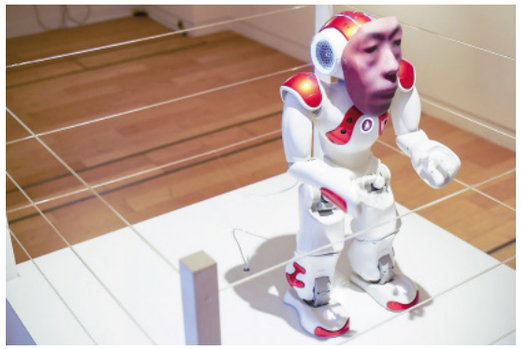
Essay　時の調べ

大好きな祖母の死をきっかけに、「いつか必ず訪れる大事な人との別れに、私たちはどう向き合えばいいのだろうか」という大きな問いが、20代後半の頃の自分に重くのしかかった。その答えを自分なりに探すために、一般的な家庭用ロボットを改造し、故人を再現する「デジタルシャーマン・プロジェクト」という作品構想の制作を2015年にスタートした。試行錯誤のすえ、故人の代替として愛着を持てるような、死後49日間だけ一緒にいてくれるロボットを開発した。生前に取得した顔・しぐさ・声などの身体的特徴をもとにアプリを開発し、死後にロボットにインストール（憑依）させる。そして、仏教で死者の魂が地上をさまようとされる死後49日間だけ稼働させ、遺族の心を癒やす手助けをする…というものだ。

開発初期は人工知能のチャットボットのようなものでその人らしい会話を残すことを想定していたが、むしろその人の身体的な痕跡やしぐさ、気配、というノンバーバルな領域の方がより強くその人の特徴を表しているのでは？という考察から現状の形態に至った。

この作品を国内外で発表した際に、興味深い反応の差異が生まれた。日本国内で発表した際には、喧々囂々（けんけんごうごう）のバッシングが来るかと思いきや、予想に反してすんなり受け入れられる傾向があり、こういった「機械に魂を吹き込む」という類の発想への、日本人の気質の適合性に気付いた。その一方で、欧州で展示をした際には驚かれることが多々あった。利便性のために存在する機械やロボットに、魂を宿らせるという発想はかなり異質であるらしい。展示を見た鑑賞者にはおおむね好評だったものの、世界中にニュース記事が拡散した際に、様々な国において「気持ち悪い」「受け入れがたい」などアレルギーのような恐怖反応が出るケースもしばしば見られた。

日本人の特質として、ロボットに対して親しみを感じる傾向が強いという。鉄腕アトムやドラえもんを筆頭にした国民的フィクションにおいてもロボットに対して牧歌的でフレンドリーなイメージが流布し、ロボット研究を志願する学生も多い。「ペットロボット」「家族としてのロボット」といった製品も、なんの違和感もなくすんなり各家庭で受け入れられている。AIやロボットに対して恐怖ではなく親しみを感じるお国柄は世界的にみると特殊らしい。特に欧米などキリスト教圏の多くでは、人工知能やロボットに大して根源的な恐怖があり、造物主のやることを人間がやると、それがやがて自分たちを脅かすのではないか、という考えがあるのだという。



展示写真　撮影：黒羽政士

ロボットの身体は実際には、単なる機構とモーターの塊だ。特に人格があるわけでもなく、それらしく振る舞うようプログラムを仕込まれているだけ。それにも関わらず、そこに日本人は「命」を見出し、自己を投影し、感情移入してしまう。日本は万物に命を見出すいわゆる「アニミズム」信仰の根付いている土地でもある。無宗教を自認している日本人も多いが、食事の前には「いただきます」と手を合わせ、動植物など人間以外の生命にも自然に敬意や感謝を表す風習にもそれは現れている。

ヒト型ロボットだけでなく、SONYのロボット犬「アイボ」葬儀の事例もある。新規生産が停止し、修理不可能になったアイボ100台が、持ち主の希望により通夜葬儀で「供養」されたとのこと。最近出演した報道番組では、人気ボーカロイドの初音ミクに永遠の愛を誓い、華々しい結婚式を挙げた男性が登場した。私見だが、これらも無生物にも命を見いだす日本人の特性という意味では同根なのではと感じている。

こうした日本人の気質は奇異にも見られることはあるかもしれないが、ロボットなど非生命の存在がより生命らしさをまとい、人間と機械の境界線が限りなく曖昧になっていくことが予想されるこれからの時代の流れにおいて、世界をリードする精神のあり方なのではないか。非生物に親しみや愛着を感じる我々の心性。それは時に奇妙にも見えるが、未来を生きる人類の新たな人間観・機械観の萌芽なのかもしれない。

略歴
早稲田大学文化構想学部卒業。Yahoo! JAPANで勤務後、現在フリーランス。日本的な文化・習慣・信仰を独自の観点で読み解き、テクノロジーを用いて新しい切り口を示す作品を制作、世界中のメディアに取り上げられている。第20回文化庁メディア芸術祭優秀賞、アルス・エレクトロニカ賞で栄誉賞を受賞。2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）日本館基本構想事業クリエイター。

展示概要

「六本木クロッシング2022展：往来オーライ！
――いま、日本の現代アートが映し出す、人・文化・自然のカラフルな交差」

会　　場：森美術館（六本木ヒルズ森タワー 53階）
会　　期：2022年12月1日（木）～2023年3月26日（日）（会期中無休）
開館時間：10時～22時（最終入館 21時30分）
※火曜日のみ17時まで（最終入館 16時30分）
料　　金：（平日）一般 1,800円（オンライン1,600円）／学生1,200円（1,100円）
（土・日・休日）一般 2,000円（1,800円）／学生1,300円（1,200円）
ほか詳細はウェブサイト参照
お問い合わせ：050-5541-8600（ハローダイヤル）
ウェブサイト：https://www.mori.art.museum/jp/exhibitions/roppongicrossing2022/index.html